

〈解答〉

① 1 くらい

2 ウ

3 【例】下々の民衆がそれを真似して華麗なものを好む（21字）

4 エ

5 (1) イ (2) 【例】儉約の姿勢

配点 ① 1、5 (1)は各1点、他は各2点 10点満点

〈解説〉

『帝鑑図説』は、1572年に成立したといわれる。『帝鑑』とは、皇帝の治世の参考になる歴史上の事例のことで、『帝鑑図説』には、81の善例と、36の悪例が挙げられている。1「ゐ」は現在では使われなくなった文字で、「い」と読み、「くらい」は「くらい」となる。

2 傍線②の前後に注目すると、「程扱」が雉の頭の毛で裘を織ったことがわかる。また、傍線②の後に「武帝に是をたてまつる（＝武帝にこの衣服を差し上げた）」とあることから、裘とは「程扱が雉の毛を使って織り、武帝に差し上げたものである」ことがわかるため、ウが適当である。

3 「御ころにおぼしめされけるは」とは「心中でお考えになったのは」という意味であり、傍線③の後にその内容が述べられている。武帝は、この裘を着ることで「下々の民衆がそれを真似して華麗なものを好む」ようになるだろうと考えたのである。

4 せん（せむ）は「しよう」という意味であるため、エが適当である。武帝は、自分が着ることで、下々の民衆が華麗を好むようになるだろうと考えた裘について、「どうしようかとお考えになられ」たのである。

5 (1) 漢文では、すぐ上の字に返って読む場合にレ点を用い、二字以上上に返って読む場合に一・二点を用いる。それを踏まえると、書き下し文に改めたときに「裘を焚きて儉を示す」となるのはイである。

(2) 武帝は、自らの手で裘を焼き捨てることで、華麗なものを好まず衣装で飾らない「儉約の姿勢」を民衆に示したのである。

〔現代語訳〕

晋の（時代の）武帝が、はじめて君主の地位に就かれたとき、軍事をつかさどる役職にある程扱という者が、雉の頭の毛で作った衣服を織り、武帝にこの衣服を差し上げた。その毛皮の衣服のはなやかな様子は、たとえようがなかった。武帝がこのことをご覧になって、心中でお考えになったのは、もし自分からこの毛皮の衣服を着るならば、下々の民衆にいたるまで、みなこの姿のまねをして、きつと華麗ではなやかなものを好むことになるだろう。それではこの衣服をどうしようかとお考えになられ、（武帝が部下に）命令を下されて、御殿の前で、火で（その衣服を）焼き捨ててしまわれた。これは

華麗なものを好まず衣装で飾らないことを、人々に示すためだったということだ。

よくよく考えるに、身分が低い者は身分が高い者のまねをよくするものなので、身分が高い者がすること、民衆は好むものなのだ。この理屈で考えると、天下を治める君主たる者は、万事を儉約すべきだということである。